The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	商自許里・ししこらかす私話 ： 文学語彙とその周辺
Author(s)	原田, 芳起
Citation	語文. 1958, 21, p. 42-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68529
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

商自許里・ししこらかす私話

——文学語彙とその周辺——

原田芳起

一

万葉集巻七の「商自許里（アキジコリ）」（一二六四）、巻十二の「思許理来目八面（シコリコメヤモ）」（二八七〇）の二つは、まだ明快というほどの解釈を得ていないことばで、大抵疑いを存しつゝ一応の解決をつけてあるのが普通である。

西市爾　但独出而　眼不並　買師絹之　商自許里鴨（一二六四）

我背子之　将来跡語之　夜者過去　思咲八更々　思許里来目八面（二八七〇）

前者の第三句「眼不並」は「メナラバス」「メナラベス」の二つの訓があり、第四「買師」には「カヘリシ」「カヒニシ」「カヒテシ」の三つの訓が見られる。問題の第五句は新考が誤字説で「商耳許里鶴」と改めて「アキニコリツル」と訓んだ外には異説がない。後者は、これも新考に第四句の「更々」を改めて「今更」とする説がある外は、訓法には異同が見られない。本論の目的は「しこり」の意味にあるので、細かなことには触れないで、私のすきなように一応よみくだしておくことにする。

西の市にただ独り出でて眼並べず買ひてし絹の商じこりかも

わがせこが来むと語りし夜はすぎぬしゐやさらさらしこり来めやも

そこで、今日一番普通に行われている解釈では、「あきじこり」は「買ひそこなひ」、「しこり来めやも」は「まちがっても来ることはあるまい」とする。しかも大抵わからないことばだとことわってある。問題はこのあたりから出発する。

この「しこり」「しこる」に「しそこない」という概念が含まっているという見解は、源氏物語若紫の

ししこらかしつる時はうたて待るを

という表現に見える「ししこらかす」という語の解釈と関連して成り立ったものである。ところで「ししらかす」の解釈が、実ははなはだ明瞭を欠く点があって、説もまた区々である。一方の解義がもっとはっきりしてこないと他方もまたあいまいな理解にとどまることになり、いわゆる堂々めぐりの状態になっている。源氏物語の註釈では万葉の註釈を引いて、「シコル」は「アヤマツ」意であるからという根拠づけに満足し、万葉語の解義ではその根源を源氏物語の註釈から引き出している。そしてどちらももひとつ何か不満を感じている。

「あきじこり」「しこりこめやも」「ししこらかす」三者に、通じて動詞「シコル」が語根としてふくまっていることは、これはまず認めてよいと思う。しかし大言海はじめ、辞書までが「シコル」の語義を「アヤマツ・シクジル」と決めてしまっているのは、いささか断定がはやまっていたと思われるので、その断定の根拠をさらに検討してみる要があるのである。

二

万葉集目安には、

商自許里鴨、ワロキ絹ヲカヒテコリタリト云心也。

思許理来目八面、シキリナル心也。

と注している。これを承けたかどうか、万葉集新考には、「商自許里」を「商為懲」と解している。「懲る」の意義を認めようとする説としてまとめることができるが、語法的ないし語構成の方式から見て、可能性の少い説である。「思許理来目八面」の方の「シキリ」説も代匠記に再び現われている。これも意味の上から見て、あまり縁遠くて、まず問題にする必要もあるまい。

注目すべき説は、やはり古義の述べる所である。今日の通説と見るべき考えは、古義から出ていると見てよい。雅澄はまず略解の「シミコル」説や代匠記の「シキル」説を批判して、源氏物語を引いて自説を述べた。

今按に商のしそこなひを云なるべし。失計(シツカヒ)ふことをシコルと云は、源氏物語に、しゝこらかしつる時はうたて待るを、とくこそ心みさせ給はめ、とあり。(孟津、しゝこらかしつる時ははしそこなふてはなり)

さらに梁塵秘抄口伝集の「しゝこらかす」の使用例をもあげ、また巻十二の「思許里」が同言であることを断定した。

そこで、古義が巻十二の歌をどのように解しているかを見よう。

思許理は失計(シツカヒ)といはむが如し。(しかるを此詞を昔より註者等心得誤りて、頻と同とせるは叶ひがたし。又岡部氏が思許理は如是在といふ義なりと云るもあたらず。

彼の説はきわめて断定的であるが、ほとんど理由を説いていないほどの単純さである。源氏物語の古註をそのまま受け入れたところにも問題があるし、「ししこらかす」と「しこる」との意味を区別なく考えているのもおかしい。それに万葉の語法としても、「しこり来めやも」で「過(アヤマ)りて来そこなひにも来らむやは」となることは納得することのできないところではないか。「しこりても来めや」ならわかる。古義の解釈は巻十二の歌の方で語法的矛盾をおかしているという疑いがあったと思う。

次は検討を要するのは、大言海の解義の根拠である。それが古義にもっとも多く依拠していることは、「あきじこり」に「買ヒソコナヒ、カヒカブリ」の意味を与えていることと、「しこる」に「ソコナフ、アヤマツ」等の訳語を附していることでもわかる。ただ古義以上に出ているのは、「名義抄、誣シコル」を文献としてあげていることである。

類聚名義抄を検すると、観智院本では、それにあたるところは、「シコハ」となっているが、これは「誣、譖、諛」等の字に附された「シコヅ」の誤ではないかと思われ、証拠とはならない。つまり万葉・源氏の解釈を成立せしめる十分な意味論的研究は行われていないということが露呈されている。

武田祐吉博士の全註釈及び全講を読むと、この語については疑いを存する方法を取っていられる。全講の方が摘要に便利であると思うから、それを引用させて頂く。

アキジコリカモ、商為懲かもで買物をして懲りたことよの意。（但し訳の方には「買ひそこなひです」とある。筆者註記）

シコリコメヤモ、シコリ未詳の語、「買ひにし絹の商じこりかも」のシコリと同義で、しそこなひしまちがひかという。

巻七の方では「懲ル」の概念を含むと見る万葉目安以来の説の方に傾き、巻十二の方では、古義の失計説に一応従って解していられる。結局通説に従っておくが、それでは十分安心はできないということを註されたものと思う。

要するに、今日通説として一応採用されているのは、古義の説であるが、その根拠は源氏物語の註釈にあった。その源氏の註釈の方は十分解決されたものであったかをいうと、決して、そうはいえない。現在までの結果で見ると、この語に関する限り、源氏で万葉を証し、万葉で源氏を証することは、困難であった。第三のもの、つまりもっと広い意味論探求を背景としなければ、これ以上進みえなくなっているということがわかる。

三

源氏物語の「ししこらかす」に関する語釈の変遷を検討しよう。現代に至る間、一番勢力のある説は「しそこなう」説であって、これを一応通説と認めてよかろう。ところが、そんな註釈によらずに素朴に読み取ったもの、文脈から汲み取ったものは、いささか通説とずれている。そこから私は出発したのである。そこで、源氏の文章を読んでみる。

北山になん、なにがし寺といふ所にかしこき行ひ人待る。こぞの夏も世に起りて人々まじなひわづらひしを、やがてとどむるたぐひあまた待りき。ししこらかしつる時はうたて待るを、とくこそこころみさせ給はめ。（若紫）

傍例となるものは、深鹿秘抄口伝集巻十の文例がある。これは古義にも雅言集覧にも引いてあるのでよく知られているが、文脈を知りたいので、群書類従の同書から少し長く引用してみる。

目井は、監物清経やまひにわづらひて限りなりけるに「ざうぼうてんじてはやくしのちかひぞ」とうたひてたちどころに病をやめ、ちかくは左衛門督通季おこり心地にわづらひて、ししこらかしてありけるに、「ゆめ〳〵いかにもなきに」（と脱カ）両度うたひて、あせあえてやみにけり。

後に列挙する諸説を批判する準備作業をこころみよう。まず、「ししこらかす」は他動詞であり、「かす」は自動詞を他動詞化する接尾語であるということを確認しよう。

まどふ――まどはかす
ころぶ――ころばかす
くるべく――くるべかす

そこで、もし「し-しこら-かす」という三元的構成を認めるとすると、「し」は本来他動詞であるから、「し」「しがら-かす」という他動詞二語を連ねたものとなり、従って「かす」で他動詞化された原動詞「しこる」は自動詞である。このことはきわめて大事な点である。

次に他動詞として機能する「ししこらかす」の目的語格は何であ

るか。右にあげた二つの文例の場合、病であるのか、治療手段であるのか。この点はあいまいにしてはならないところである。そのために、

病をこじらかす
治療をしそこなふ

の両解が対立することになる。

この語を扱った一番たいせつなものは河海抄であろう。

為発（シシコラカス）或起。世俗に、しそびらかすといふやうなる心か。

この解義は二段にわけて考えられる。上に漢字を記したのは、訓読語例を示したものかとも思われ、註者の解釈を、漢字で示したか、とも思われる。下に世俗に云云としたのは、類義語をあげたので理解を助ける手段と見るべきである。しかるに後の学者はみな下段のみを重視して、上段「為発」の文字を完全に無視している。「シコル」といふ自動詞に、発または起の意味があるのではないかと疑ってみた人はないようである。

下段の「しそびらかす」についていえば、「そびる」は下二段の自動詞と見られる。語根に背まとは外の意義を含む「そ」を認められるとすれば、「逸脱する」「それる」の意味をとらえられそうである。なすべき適当の時機もしくは手段を失する意味から「しそこなう」意味にもなり得る。後の「失計」説の淵源はここにある。しかしこの語の構造から分釈を細かにすれば、「そびらかす」はやはり事態が意図から逸脱するようにしてしまうのであって、「そびれる」のは事態の側であり、「失敗」は自己の側である。だから「失計」は「し」の中に関係的に附着した意味であり、

し＝することのまずさによって、
そびら＝事態がそれてゆくように
かす＝してしまう。

の三元を認めることができる。これに準ずるならば、

し＝治療手段のまずさによって、
しこら＝病がシコルように
かす＝してしまう。

という構成をもつはずである。そこで「シコル」の意味は何か。それを河海抄は「発」あるいは「起」で示したと考えることができると思う。これを一つの注意点として提示しておく。

湖月抄は新見を示さず、孟津・細流の二抄の説を並べている。

孟、しそなふてはと也。細、瘧はしそびらかしてはあしくておちかぬる由也。

河海説と同趣のものである。この解の中から「シコル」を抽出することはできない。中世の註釈は分析することがないことをその特性の一つとする。

近世の説は、語全体としての意味づけは中世の説と同方向があるが、語を分析し、語源から説こうとする特性が見られる。こゝには特に注意すべき説だけあげてゆく。まず真淵の新釈の説。

上のしは為なり。次のしこらしは物の凝かたまるなり。うたてはせんかたなきなり。右のごとくなま〳〵のまじなひなど為、しこらかしては云云となり。

「しこる」の中に「コル」（凝）の概念を認めようとするものである。その当否は別として、分析的に、語源的に考える方向に、中世の語釈とちがった性格がある。近代の学説でも、万葉集註釈は、

シコリは凝り固まる意で云云

とこの説を用いている。

次に注意すべきは、萩原広道の源氏物語評釈の説である。語源の考えで真淵とかなり別の行き方をしている。

しじこるは縮凝の意なるべし。まじなひ損ずれば病の縮み凝りておちかぬる也。

意味づけの方向では、真淵とも古来の註釈ともほぼ同じであるが「しじ-こらかす」と分割して考えて、「為」を追ひ出してしまった点で独自な考えとなっている。「し損ずれば」という意味は文脈にあずけることができると思ったのか。この分割には、問題があろう。「しでかす」「しそびらかす」「しくじる」「しそこなふ」などの類型を並べてゆくと、語頭に「為」が冠せられていることは明らかである。もし病がこじれる意味の「シジコル」が存在したと仮定するならば、ありふれた語であるべきで、他に文献を発見できそうなものである。

評釈の説には無理があって、そのままを承けたものはあまり見ない。ただ一説にそなえるといったところ。しかるに奇妙な影響をその後の源氏物語学に与えた。それは、第二音を濁って「しじこらかす」と読むようになったことである。「し-しこらかす」の構成でも連濁で濁ることはありえないことではないが、事実は、評釈以前には濁って読んだ例を見ないように思う。この点、現代のほとんどの人が濁って読んでいるのであるから、一応管見を記しておきたい。

まず、尾州家河内本源氏物語の本文に附された声点が注意を要する。

ししこらかし

第二音が清んでいる。またアクセント的にはこの語は一語化されない形を示している。すなわち「シ—シコラ—カシ」のようにアクセント的には三語になっているのである。第二音に連濁が起らないのはその結果である。

里村紹巴の源氏物語抄でもこの語に清濁点を附しているが清点である。どうもこの語は濁って読むのは広道以後の誤りではないかという疑問を持たされる。

そこで山脇毅博士に版本におけるこの語の清濁はどうなっているだろうかという御話をしたことがあったら、その後まもなく御所持の本についてたしかめて下さった。濁ってよむ例は、版本では、なさそうだということであった。博士が御教示下さった版本の名称を右に記録しておく。もちろん全般に濁点を施している版本について調べて下さったものである。

万水一露　天正三年成　寛文三年刊　承應九年跋
首書本　寛永十七年成　寛文十三年版
絵入大本　慶安二年刊　承應三年再刊
絵入小本　刊記なし
湖月抄　延宝元年跋　同三年刊

この御教示は非常に有難かった。「しじこらかし」と濁るようになったのは、評釈の語源説「縮凝」から来たもので、この語源説を採用しない限り不条理なものと断じてよい。源氏物語大成索引篇では濁っていない。これが正しいわけである。

附言しておくが、「為」を冠した複合語でそれに接する語の第一音に連濁が起るかどうかを大言海で検したが、一例も濁ったものは見られない。これでも「しじこらかし」と濁らすのは正しくないことが証されると思う。

さて源氏物語の註釈中、注目すべき説は全部あげたわけであるがこれだけでは、はたして「シーシコラーカス」が正しいか、「シジーコラカス」が正しいかを決定することはできない。源氏を解するには万葉を引き、万葉を解するには源氏を引き、どちらもかなり無理な意味づけをしている限りは進みようがない。鹿持雅澄の古義の説が勝利をしめた形で、大言海以下それを用いて、源氏物語の註解もその線で支配されているのが現状である。

「シコル」にはたして「為損じる」意味があるかは万葉では証明されていない。それでは源氏の文ではどうか。前にも述べたように「シコル」を語構成要素として認めればこれは自動詞であったはずである「シコル」が「しくじる」意味だったら「シーシコラーカス」が成立しなくなる。万葉十二の歌でも「シコル」は自動詞であると思われる。源氏の「しーしこらーかす」においては、「しそこなふ」意味は、むしろ前にも触れたように、「し」の中にあると解される可能性が大きい。治療の手段を誤って、病をして「シコラ」しめると解するのが、語構成の条理であるように思う。

結局は「シコル」の語意を証明することが最大のきめ手となって来る。さいわいにこの語は現代の方言にかなりの分布を示し、文献にもいくつかの派生語を残している。これを閑却したのは手落ちであったと見なければならない。

四

万葉の「シコル」も多分同語であろうと思うと、これは非常に長く活きつづけたことばである。源氏物語の「ししこらかす」にしても、中世までは俗間にも用いられた語であることは、俚言集覧が大友興廃記の用例をあげているのでも察せられる。

近松の語彙にも「しこりばくち」「飲みしこる」の例をあげることができる。これが同語であるかの説明は後にしよう。

全国方言辞典から、各地の方言に現われる「シコル」の意義素を類型によって整理してみると次のようになる。

a　繁る、「草がシコル」
b　威張る、気取る、肩をそびやかす、「アイツガシコツトル」
c　強くなる、烈しくなる、「風がシコル」
d　さわぐ、あばれる、
e　病気がぶりかえす、

わたくしの郷里（熊本県阿蘇郡）の方言でこのabの意味でよく用いていたのを覚えている。

稲ノ株ガヨウシコッテ来タ
シコッテサルク（威張って歩く）

熊本県の一部では、威張るなという意味で「シコライナ」「シコルナ」などいう。ab二つの意味が自然に通ずるのは、肩をそびやかすのが、自分を大きく見せようとする点で、草木が繁って量を増すのと共通するからである。それから推してcdeの意味も同語から派生したものとして、十分理解できる。eの病気がぶりかえすも勢を増して来る点は同じではないか。

大言海に「しこり」（痼）を載せている。「病ニ因リテ肉中ニ塊ノ如キモノノ起ルコト」と説明し、浮世風呂の、

ヨクしこりも取レテ乳ロノ明クオ薬が御座イマシタ

を引いている。これも同系語であることは疑いもない。俚言集覧には

しこり　堆核〔広恵済急方上〕

を記している。病が増長し根強くなって、ぐりぐりのようなものになったものをいうのである。わだかまりの意にも転用されるものであるが、はじめかすかに苦痛を与えていたものが次第にシコッて来て、ついに抜きがたいかたまりとなると感じたことを表わしていると思う。

近松語彙の「飲みしこる」は、次第に増長して烈しく飲む意味でよくわかる。「しこりばくち」も次第に深入りして、とめどなく猛烈にばくちに打ち込むこととして理解できる。

パジェスの日仏辞書にも、傲慢な威張った態度や物言いを「シコル」の意味としているようだ。(taut entier)

前にも述べたように、大言海に「しそこなふ」意味の「しこる」をあげているが、万葉集古義あたりから抽出したもので、「しこる」の語例からそれを実証することはできない。

九州のあちこちの方言に、「量」の概念を表わす「シコ」「シコラ」がある。わたくしはこれも何か関連がありそうに思っている。農村語彙であって、作物の成長繁殖を表わす「シコル」から、「シコル」の程度をもって「量」の概念を表わしたものではあるまいか。

方言によっては、「大きいこと」を意味する「シコ」がある。俚言集覧に、

しこたま多き事、シコデコとも云、醜の意なるべし。

しこでこない　遠にていと大なる物を云、シコは醜の義、デコはデカともいふ。大きなる事也。重ねていへるなり。

この「シコ」も同系の語であろう。古代語の「シコ」がどこに意義の核をもつかはにわかに定めがたいが、はじめ形の大きなもの、力の強い者の意味から、やがて醜悪を意味するようになり、ついには詈詞となったのではないかと思う。

五

右に説いた「シコル」の意味で、源氏物語及び万葉集の問題の語を説明することができるか。わたくしは、それができるばかりでなく、断定的な解釈がこれで始めて成立すると考える。

源氏物語の「ししこらかす」は、

治療のあやまりで――し

病勢を増強するように――しこら

してしまう――かす

と解すればよいことは、前の説明を綜合すれば、疑いもないことと思う。これは一語であてれば「こじらす」といえる。しかし語根の「シコル」に「誤る」意がないことは断定しておく必要がある。

この断定が万葉の場合を正解するのに大切である。巻七の「商自許里」は、私見では暴利の意である。買ひそこなひと解釈されたためにわからなくなったのである。商なうのは買う側ではなくて売る側の行為であるはずである。商行為が「シコル」ことであって、実質以上の高値を買い手におしつけることにちがいない。商人が大いにもうけること、大してもないものを高くつかませること、それが「あきじこり」である。

西の市に出て、人にも見てもらわずに、うっかり自分独りぎめで買ったあの絹の、――まあ何という暴利、何という無茶なもうけかたをするものだろう。

商人の大もうけは、買い手側の大損であることはいうまでもない。

巻十二の例は、「あやまり」説では解けないように思う。「しこり来めや」で「まちがいにも来ようか」になる語法的な可能性がないことを前にも述べた。「しこり」は男の威勢のよい様子とか、誇大な表情とかを表わして、下の「来」を限定していると考えたらいかがであろうか。いささかコミカルな表現で、日ごろ男が来る時の「シコッ」た、大げさな表情を思い出して、「今となってはもうあの人がいつもの大げさな表情でさわぎながらやってくることがあろうか」となげいているのである。上に「わがせこが来むと語りし時すぎぬ」とあるが、この「わがせこ」は、「うちのひと」とか「こちの」とかいうのと同じように、「あの人」ぐらいのところか、一首の意から、呼びかけではない。だから独白的な形の歌で、多少悪口になっているので、「例の心にもないことまで誇大にしゃべりながら恩に着せるようにふるまう」男のようすを、「しこり」と深らつに表現してもよいと思う。現代の方言の用法をそのままあてても、一通りはわかる歌である。

アノ人が必ズ来ルト約束シタ時モ過ギテシモウタ。アアシャクダ、モノ今更アノ人ガイツモノヨウニハシャギナガラ「シコッ」テ来ルコトナンゾアルモンカ。

なお、「シコル」は「シコ」を用言化したものか、「おひこる」「はびこる」「おしこる」などと共通した構造を持つものであるかそれらの点は現在の資料のみでは十分断定しうるに至らない。

（附記、巻十二の「シコリコメヤモ」は、今更「威張って来るようなことをさせはしない」と解してもおもしろい）

—大阪樟蔭女子大学教授—